

原著論文

## 高校中退リスク評価尺度 (RAS-HD) の開発 —信頼性およびカットオフ値の検討—

### Development of Risk Assessment Scale for High School Dropout (RAS-HD) : Examination of Reliability and Cut-off Point

小栗 貴弘  
Takahiro Oguri

#### 【要約】

本研究の目的は、高校中退の高リスク群をスクリーニングするためのテストを開発することであった。まず、先行研究を参考に 47 項目を採集し、高校生を対象に質問紙調査を実施した。また、各校の教員に生徒のその後の登校状況について回答を求めた。項目分析と因子分析の結果、6 因子 35 項目で構成される尺度を作成し、「高校中退リスク評価尺度 (RAS-HD : Risk Assessment Scale for High School Dropout)」と命名した。また、分析の結果、高い信頼性を有していることが確認された。さらに、RAS-HD 得点を説明変数、その後の登校状況を従属変数とした ROC 曲線の分析から、高校中退予防のためのスクリーニング・テストとして最適なカットオフ値を算出した。最後に、今後の課題について考察した。

#### 【キーワード】

高校中退、選択的予防、スクリーニング・テスト、信頼性、ソーシャルサポート

### 1. 問題と目的

#### 1. 高校中退の現状と原因

文部科学省 (2018) によれば、平成 28 年度の高等学校 (以下、高校と略記) において中途退学 (以下、中退と略記) した生徒の数は全国で約 4 万 7 千人に上り、高校中退率は 1.4% であった。高校を中退した生徒がその後どのような生活を送っているのかについて、東京都教育委員会 (2013) は平成 22 年度と平成 23 年度に都立高校を中退した生徒 5526 名に対し、平成 24 年 7 月～11 月に調査を行い、20.4% の中退者から回答を得ている。それによると、調査時点でフリーターまたはニートだった中退者は 47.6% であった。同様に、埼玉県教育委員会 (2011) では、平成 21 年度に県立高校を中退した生徒 2651 名に対し、平成 22 年 11 月～翌年 1 月に追跡調査を行い、14.0% の回答を得ている。それによると、調査時点でフリーターまたはニートだった中退者は 51.7% であった。回収率の低さから、実際に社会的弱者の立場より抜け出せない高校中退者の割合はさらに多いことが容易に想像できる。このような中退の状況について、内閣府 (2010) は“高校中退は、フリーターや若者無業者など社会的弱者に至るリスクが高く...高等学校在学中における早い段階から計画的に支援を行っていくことが必要である”と指摘している (内閣府、2010、p.9)。

高校中退が社会的な問題となる一方で、中退経験者に中退の理由を問うという手法を中心に、高校中退の原因を明らかにしようとする研究が蓄積されてきた。大谷・清水 (1989)、

窪島・片岡（1995）、高田（1999）、杉山（2007）は中退者を対象にアンケートや面接調査を行い、「教員との関係性」「学業面」「友人関係」「校則への不満」「入学動機」などが中退の主な原因になり得ると指摘している。また、縦断的手法を採った数少ない先行研究の一つが Suh, Suh, & Houston（2007）であり、その中では「成績不良」「停学経験」「低い社会経済的背景」などを中退リスクとして検討している。また、竹綱・鎌原・小方・高木・高梨（2009）も同様の手法で、「親との関係」や「学校満足度」が中退に影響していることを明らかにしている。

## 2. 高校中退における予防的介入とスクリーニング・テスト

小栗（2014）は、高校中退予防における予防的介入を“1）普遍的予防とは、全ての生徒を対象とする介入であり、学習スキルや対人関係スキルに関する授業を言う。2）選択的予防とは、欠席や問題行動といった中退の兆候は示していないものの、スクリーニング・テストにおいて高リスク群と判断された生徒に対して行う、個別の支援や日常生活での配慮を言う。3）指示的予防とは、中退には至っていないものの、不登校、いじめ、障害、非行など、中退に至る兆候を示している生徒に対して行う、個別の支援のことを言う。”と、定義している（小栗、2014、p.56）。

上記のように、高校中退の予防にはさまざまな段階での介入が考えられるが、先行研究ではリスク集団を同定していない普遍的予防に関する実践研究が多い。たとえば、Thompson, Eggert, Randell, & Pike（2001）、深谷・丸山（2010）、小栗（2015）では中退予防を目的としたソーシャルスキルトレーニングを実施し、それぞれ抑うつやソーシャルスキルという点で効果を確認している。Freeman, Simonsen, McCoach, Sugai, Lombardi, & Horner（2015）では、近年注目されている SWPBIS（School Wide Positive Behavior Interventions and Supports）というプログラムを実施し、出席の増加という点で効果があったと報告している。このように、中退予防の実践研究では普遍的予防に関する研究が大半を占めており、選択的予防や指示的予防に関する知見の蓄積が急務であると言える。

高校中退の選択的予防では、予防的介入の事前評価および効果評価に用いるスクリーニング・テストが必要となってくる。ところが、高校中退リスクを評価するという点で信頼性や妥当性の確認されている尺度は、筆者の知る限りでは開発されていない。たとえば、高校生の学校適応を測定する上で用いられている尺度に、河村（1999）の「学校生活満足度尺度」、太田（2002）の「高等学校新入生用適応感尺度」、新井・古河・浅川（2009）の「高校生用学校適応感尺度」などがあるが、いずれも高校中退との関連については検討していない。さらに、先行研究において Suh et al.（2007）は「低い社会経済的背景」、竹綱他（2009）は「親との関係」を中退要因として挙げているものの、これらに関する項目は上に挙げた尺度の中には含まれていない。

## 3. 本研究の目的

本研究では、①高校中退予防における選択的予防を実施するための、スクリーニング・テストの原案を作成すること、②その信頼性を検討すること、③スクリーニングのためのカットオフ値を検討することを目的とする。

## II. 方 法

### 1. 調査協力校および調査協力者

全日制高校、定時制高校、通信制高校の各 2 校、計 6 校で調査を実施した。調査は全部で 3 回実施した。調査 1 では 1,440 名の生徒を対象に調査を実施した。この内、記入に不備のない 1,300 名（男子 670 名、女子 630 名）の回答を分析の対象とした。調査 2 では再検査信頼性を検討するために、調査 1 の生徒の一部に再調査を実施した。この内、調査 1 と調査 2 のいずれにおいても記入に不備のなかった 1,010 名（男子 513 名、女子 497 名）の回答を分析の対象とした。調査 3 では、作成した尺度で中退の高リスク群を抽出するためのカットオフ値を設定することを目的として、調査協力校の教員を対象に、生徒のその後の登校状況について尋ねた。その結果、調査 1 で回答に不備のなかった生徒の内、1,126 名分（男子 567 名、女子 559 名）の回答が得られた。

### 2. 調査の時期

調査 1 は 2013 年 6 月、調査 2 は同年 11 月に、各担任によるクラス一斉方式で実施した。また、調査 3 は 2014 年 4 月に各調査協力校へ回答を求めた。

### 3. 調査内容

**調査 1 および 2** 小栗（2013）、竹綱・高梨・鎌原・小方・高木（1998）、新井他（2009）、河村（1999）、古市（2004）、本間（2000）などの先行研究を参考に、高校中退を抑制すると考えられる 47 項目で構成される尺度を作成した。その際、先行研究で中退の原因になり得ると指摘されていた「教員との関係性」「学業面」「友人関係」「親との関係」「学校満足度」に関する項目がバランスよく入るよう構成した。また、中学生の不登校研究において、古市（2004）は「学校生活享受感情」、本間（2000）は登校への「規範的価値」が規定要因になり得ると指摘している。学校生活享受感情はどれほど学校生活を楽しんでいるか、規範的価値は学校へ登校することに対してどれほど価値を抱いているかについての指標である。これらについての項目も、高校生の中退予防研究の参考になると考え、尺度の原案に含めた。さらに、先行研究ではソーシャルサポートの心理的サポートに関する項目しか含まれていないため、サポート源ごとに道具的サポートと考えられる項目を加えた。

尺度項目を検討する際、予防的介入のスクリーニングおよびアセスメントに用いるという本尺度の用途を考慮し、教員、主に担任が生徒や家庭に介入することで変化させることができる変数か否かということ判断基準とした。生徒を対象に、項目内容についてどの程度あてはまるかを 5 件法（「とてもあてはまる（5 点）」「少しあてはまる（4 点）」「どちらでもない（3 点）」「あまりあてはまらない（2 点）」「全くあてはまらない（1 点）」）で尋ねた。

**調査 3** 中退の高リスク群を抽出するためのカットオフ値を設定するために、それぞれの生徒が 2013 年度中に中退したか否かについて、各調査協力校の教員に回答を求めた。

#### 4. 倫理的配慮

生徒への調査は担任によるクラス一斉方式で実施するため、各生徒に対して担任より文面および口頭にて、①調査への回答が自由意思にもとづくこと、②回答結果は成績評価には全く関係しないこと、③研究で得られたデータは研究以外の目的には使用しないこと、④個人名等のプライバシーは保証すること、⑤支障が生じた場合には途中で拒否できることを説明した。また、各調査協力校の校長に対して本研究の目的や発表手段等を説明し、生徒および教員への調査について、研究協力の承諾および研究依頼書への署名・捺印を得た。なお、調査にあたっては連結可能匿名化を行い、3回の調査協力者の同定は出席番号を用いて行った。さらに、各生徒の調査結果は個票として各調査協力校にフィードバックを行い、高リスクと考えられる生徒についてはその旨を記載した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 項目分析

調査1のデータを用いてGP分析を行った。まず、47項目の合計得点を算出し、上位25%以上（178点以上）の生徒を高群、下位25%以下（143点以下）の生徒を低群に群分けした。高群には326人、低群には324人の生徒が該当した。そして、群を独立変数、各項目得点を従属変数とする対応のない $t$ 検定を行った。その結果、全ての項目で有意差が認められた（ $df=648$ 、両側検定、 $p<.001$ ）。次に、調査1のデータを用いてI-T相関分析を行った。各項目得点と47項目の合計得点とのPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、全ての項目で合計得点との有意な相関が認められた（ $p<.01$ ）。以上の結果から、作成した47項目はいずれも識別力を有していると判断した。

#### 2. 尺度の因子構造

尺度の因子構造を検討するために、調査1のデータを用いて探索的因子分析を行った。まず、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、固有値1.0以上で9因子が抽出された。いずれの因子においても因子負荷量が.40に満たなかった10項目（「学校には楽しいことがある」「学校で友達に会うことが楽しみだ」「親は私の学校の成績を気にしている」「親は私の卒業後の進路を気にしている」「学校の帰りが遅くなったときなど、親が迎えに来てくれる」「学校を休むと、次の日に行きにくくなる」「学費や給食費などは、親がお金を出してくれている」「自分には、得意な教科や好きな教科がある」「勉強でわからないことがあると、先生に質問する」「自分には取りたい資格がある」と、2因子以上で因子負荷量が.40以上だった2項目（「自分の苦手なことを、先生はわかってくれている」「クラスには、気軽に話せる友達がいる」）を除外した。その後、指定する因子数を変えながら、残った35項目で因子分析を繰り返した結果、各因子に含まれる項目数のバランスや因子の解釈可能性の観点から、6因子解が妥当であると判断した。具体的な項目内容と因子分析結果を表1に示す。

表 1 因子分析結果（プロマックス回転後）(n=1,300)

項目	因子					
	I	II	III	IV	V	VI
<b>I. 学級満足感(α=.91)</b>						
46 自分のクラスは仲がいいと思う。	.89	-.04	-.04	-.01	.03	.00
40 クラスの雰囲気が入っている。	.89	-.05	-.02	.02	.02	-.02
36 自分のクラスが好きだ。	.80	-.02	.02	.12	-.03	.01
42 クラスはよくまとまっていると思う。	.79	-.05	-.07	-.01	.04	.05
44 クラスは明るい雰囲気だ。	.75	.06	-.03	-.08	-.02	.08
38 高校生活に満足している。	.56	.07	.14	.06	.04	-.01
<b>II. 登校義務感(α=.87)</b>						
45 学校へは行かなければならない。	-.09	.82	-.04	-.04	.01	.02
39 学校に行くのは当然だ。	.00	.82	-.05	.01	.00	.06
47 「毎日学校に通う」ことが大切だ。	.01	.80	.03	.02	.01	.01
35 病気やけが以外で学校を休むことはよくない。	-.04	.64	.00	.08	.06	-.03
43 学校に行くことが、自分の仕事だ。	.03	.62	.05	.02	.00	.07
41 なるべくなら、学校は休みたくない。	.06	.56	.04	.08	.15	-.02
<b>III. 教員サポート(α=.82)</b>						
24 自分の得意なことを、先生はわかってくれている。	.03	-.06	.71	.03	-.01	-.02
26 先生は自分の話を、最後まで聞いてくれる。	.01	.09	.71	-.10	-.03	.02
25 友達に嫌なことをされたら、先生は指導してくれる。	.01	-.01	.69	-.05	-.03	.06
21 友達関係で嫌なことがあると、先生に相談する。	-.17	-.06	.65	.05	.00	.01
23 先生と気軽に話すことができる。	.03	-.02	.64	.16	-.10	-.07
20 先生は勉強をわかりやすく教えてくれる。	.10	.06	.52	-.12	.17	-.01
19 将来の進路で迷ったら、先生に相談しようと思う。	-.04	.06	.50	.05	.06	.07
<b>IV. 友達サポート(α=.79)</b>						
03 クラスの友達とよく買い物に行く。	.03	-.01	.03	.70	-.13	-.06
02 クラスの友達に自分の悩みを相談することがある。	.02	.01	.04	.65	-.02	.00
08 クラスには、グチを言える友達がいる。	-.01	.10	.00	.65	-.16	.05
06 クラスの友達と進学や就職について話すことがある。	-.04	.03	-.07	.64	.07	.01
07 クラスの友達と一緒に勉強することがある。	.03	-.01	-.07	.63	.18	-.04
05 クラスの友達とよくゲームなどをして遊ぶ。	.07	.03	.12	.47	-.09	-.09
<b>V. 積極的学習(α=.77)</b>						
31 学校の勉強には、進んで取り組んでいる。	.02	.05	.02	.02	.78	-.12
32 宿題は忘れずにやっている。	-.01	.00	.01	-.03	.70	-.03
33 授業をまじめに受けている。	.04	.15	-.10	-.08	.65	-.01
28 学校での勉強はよくわかる。	.07	-.01	.26	-.12	.45	-.09
<b>VI. 親サポート(α=.73)</b>						
13 その日、学校であったことについて親と話すことがある。	.01	-.14	.00	.11	.18	.66
10 食事の用意は、親がしてくれている。	.10	.09	-.03	-.15	-.16	.58
14 寝坊しそうなときは、親が起こしてくれる。	.07	.07	-.01	-.01	-.18	.55
09 学校の勉強について、親と話すことがある。	-.05	-.04	-.03	.13	.25	.53
18 衣服の洗濯は、親がしてくれている。	.05	.11	.02	-.13	-.19	.50
17 悩みを抱えているとき、親に相談することがある。	-.11	-.09	.16	.06	.16	.48
因子間相関						
I	—	.45	.36	.41	.28	.27
II		—	.36	.20	.42	.28
III			—	.34	.53	.32
IV				—	.20	.28
V					—	.38
VI						—

第Ⅰ因子について、因子負荷量の高い項目の内容を検討したところ、「自分のクラスは仲がいいと思う」「クラスの雰囲気が気に入っている」など所属しているクラスへの肯定的な感情から構成されていたため、「学級満足感」と命名した。第Ⅱ因子は「学校へは行かなければならない」「学校に行くのは当然だ」など登校することへの義務感に関するもので構成されていたため、「登校義務感」と命名した。第Ⅲ因子は「自分の得意なことを、先生はわかってくれている」「先生は自分の話を、最後まで聞いてくれる」など教員からのサポートに関する項目で構成されていたため、「教員サポート」と命名した。第Ⅳ因子は「クラスの友達とよく買い物に行く」「クラスの友達に自分の悩みを相談することがある」など友達からのサポートに関する項目で構成されていたため、「友達サポート」と命名した。第Ⅴ因子は「学校の勉強には、進んで取り組んでいる」「宿題は忘れずにやっている」など学習に対する積極性から構成されていたため、「積極的学習」と命名した。第Ⅵ因子は「その日、学校であったことについて親と話すことがある」「食事の用意は、親がしてくれている」など親からのサポートに関する項目で構成されていたため、「親サポート」と命名した。

因子分析の結果、残された35項目を高校中退リスク評価尺度（以下、RAS-HD：Risk Assessment Scale for High School Dropout）と命名し、その合計点をRAS-HD得点とした。RAS-HD得点の範囲は35点から175点であり、得点が低くなるほど高校中退リスクが高くなると考えられる。また、因子分析の結果得られた6因子をRAS-HDの下位尺度とし、各因子に含まれる項目の合計点を下位尺度得点とした。

### 3. 信頼性の検討

内的整合性の点からRAS-HDおよび下位尺度の信頼性を検討するために、調査1のデータを用いて尺度ごとにCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。分析の結果、RAS-HDの $\alpha$ 係数は.90であり、高い内的整合性が確認された。また、各下位尺度の $\alpha$ 係数は.73～.91であり、十分な内的整合性が確認された。各下位尺度の $\alpha$ 係数は表1に示した。

再検査信頼性を検討するために、調査1と調査2のいずれにも回答し、かつ回答に不備のなかった生徒1,010名のRAS-HD得点および下位尺度得点について、尺度得点間の相関係数を算出した。分析の結果、RAS-HDの相関係数は.70であり、高い相関関係が認められた。また、各下位尺度の相関係数も.62～.74（学級満足感： $r=.67$ 、登校義務感： $r=.66$ 、教員サポート： $r=.62$ 、友達サポート： $r=.64$ 、積極的学習： $r=.63$ 、親サポート： $r=.74$ ）であり、これらについても高い相関関係が認められた。

これらの結果から、RAS-HDは高い信頼性を有していることが示された。

### 4. カットオフ値の検討

高校中退の高リスク群をスクリーニングするためのカットオフ値を検討するため、調査1と調査3のデータの両方で不備のなかった生徒1,126名のデータを分析したところ、3年生および4年生（定時制）においては中退者が1名ずつと極端に少なかった。そのため、カットオフ値の検討から3年生と4年生385名のデータを除外し、1年生と2年生741名（登校群：712名、中退群：29名）を分析の対象とした。

まず、年度末の登校状況を従属変数（登校群および中退群）、RAS-HD得点を説明変数

として Receiver-Operating-Characteristic (以下 ROC) 曲線を求めた。曲線の精度として ROC 曲線下面積 (AUC: Area Under the Curve) を算出したところ .70 であったことから、ある程度の識別力を有しているモデルであると判断した。その後、ROC 曲線の落差の推移を参考にしながら、学校現場で選択的予防のために用いるスクリーニング・テストであるという目的を果たせるカットオフ値を検討した。つまり、高リスク群として抽出する人数は可能な限り抑えながらも、高確率で中退者を予測している ROC 曲線の座標を検討した結果、RAS-HD 得点 105.5 がカットオフ値として最適であると判断した。よって、RAS-HD 得点 106 点以上を高校中退の低リスク群、105 点以下を高リスク群と定義することとした。

## IV. 考 察

### 1. RAS-HD について

RAS-HD および各下位尺度について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、いずれの尺度においても高い数値が得られた。「親サポート」で .73、「積極的学習」で .77 という値であったが、それぞれに含まれる項目数が 4～6 項目と少ないことを考慮すれば、概ね十分な内的整合性を有していると言えよう。RAS-HD 全体における  $\alpha$  係数は .90 と非常に高く、35 項目の合計得点を RAS-HD の代表値とすることが可能であると考えられる。また、尺度の信頼性係数を安定性の点から推定するために再検査法による検討を行った。調査 1 と調査 2 のデータの相関係数を算出したところ、いずれの尺度においても高い相関関係が認められた。調査 1 と調査 2 では 4 ヶ月の期間が空いており、調査 1 の回答を生徒が覚えていたとは考えにくい。したがって、RAS-HD は十分な再検査信頼性を有していると考えられる。

また、RAS-HD は高校中退における選択的予防のためのスクリーニング・テストであるため、カットオフ値を設定した。その際、年度末の登校状況を従属変数、RAS-HD 得点を説明変数とした ROC 曲線を求め、その落差から最適なカットオフ値を算出した。つまり、縦断的な手法を用いてカットオフ値は算出されている。先に述べたように、高校生の学校適応を測定するための尺度はいくつか開発されており、それらの中にはカットオフ値が設定されているものもある (たとえば、河村、1999; 太田、2002)。しかしながら、それらは平均値と標準偏差を参考に群分けをしており、本研究のように縦断的調査でカットオフ値を算出したものはない。高校中退の高リスク群をスクリーニングするという目的のためには、将来の登校群と中退群を効率よく識別できるカットオフ値が重要であり、RAS-HD はそうした意味で利用可能性の高い尺度であると言える。

### 2. 今後の展望

本研究の目的は、高校中退の高リスク群のスクリーニング・テストである RAS-HD を開発することであった。検討の結果、本研究で開発された RAS-HD は高い信頼性を有していることが確認された。また、尺度の中に高校中退予防で活用しやすいソーシャルサポートに関する尺度が含まれているところも特徴である。

今後の課題としては妥当性の検討、特に将来の中退を予測するという予測的妥当性の検討が、スクリーニング・テストとして不可欠であると考えられる。また、実際に選択的予

防の介入に RAS-HD を用いて、その効果評価を行うことも重要である。RAS-HD によって高校中退のリスクが高い生徒がスクリーニングされた場合、そういった生徒に対してどのような介入が効果的であるのか、より詳細な検討が望まれるところである。

### 引用文献

- 新井 肇・古河 真紀子・浅川 潔司 (2009). 高校生の学校生活適応感に関する学校心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要, 34, 57-62.
- Freeman, J., Simonsen, B., McCoach, D.B., Sugai, G., Lombardi, A., & Horner, R. (2015). An analysis of the relationship between implementation of school-wide positive behavior interventions and supports and high school dropout rates. *The High School Journal*, 98, 290-315.
- 深谷 佳子・丸山 広人 (2010). 教育困難校におけるグループ・ワークに関するアクションリサーチ：第一次予防の観点から 茨城大学教育実践研究 茨城大学教育学部附属教育実践総合センター 編 (29), 255-269.
- 古市 裕一 (2004). 小・中学生の学校生活享受感情とその規定要因 岡山大学教育学部研究集録 (126), 29-34.
- 本間 友巳 (2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48 (1), 32-41.
- 河村 茂雄 (1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発：学校生活満足度尺度 (高校生用) の作成 岩手大学教育学部研究年報, 59 (1), 111-120.
- 窪島 務・片岡 千幸 (1995). 高等学校「中途退学」者問題に関する調査研究：「中退」経験者へのアンケートを通して パイディア：教育実践研究指導センター紀要, 3 (2), 101-107.
- 文部科学省 (2018). 平成 28 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(確定値) について 文部科学省 Retrieved from [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/02/1401595.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/02/1401595.htm) (2018 年 9 月 24 日)
- 内閣府 (2010). 子ども・若者支援地域協議会運営方策に関する検討会議報告書 内閣府 Retrieved from <http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/shien/pdf/honpen.pdf> (2018 年 9 月 24 日)
- 小栗 貴弘 (2013). ソーシャルサポートを活かした不登校予防プログラムの評価研究 目白大学心理学研究, 9, 23-36.
- 小栗 貴弘 (2014). 定時制高校の中途退学予防に関する実践研究 目白大学心理学研究, 10, 55-69.
- 小栗 貴弘 (2015). 定時制高校におけるソーシャルスキルトレーニングの効果評価：自己評価・自由記述・他者評価による検証 作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部教職実践センター研究紀要 (2), 30-39.
- 太田 恭子 (2002). 高校生の適応に関する研究 -- 高等学校新入生用適応感尺度 (AEFS) の開発を通して 教育学研究, 2, 1-16.
- 大谷 尚子・清水 利江 (1989). 高校中退に関する実態調査 -- 中退に至るまでの過程と中退者の心身の状況について 茨城大学教育学部紀要 教育科学 教育科学 (38), p193-205.
- 埼玉県教育委員会 (2011). 高等学校中途退学追跡調査報告書 埼玉県教育委員会 Retrieved from <https://www.pref.saitama.lg.jp/f2209/toukei/documents/444232.pdf> (2018 年 9 月 24 日)
- 杉山 雅宏 (2007). 「高校中途退学の原因」に関する調査研究 研究紀要 (6), 87-99.
- Suh S, Suh J, & Houston I. (2007). Predictors of categorical at - risk high school dropouts. *Journal of Counseling & Development*, 85, 196-203.
- 高田 晃治 (1999). 高等学校中途退学者のアイデンティティ発達に関する一考察 -- 定時制高校で学ぶ生徒について 心理臨床学研究, 16 (6), 604-610.
- 竹綱 誠一郎・鎌原 雅彦・小方 涼子・高木 尋子・高梨 実 (2009). 高校生の学校適応に関する縦断的研究：重要

- な他者との関係と学校雰囲気の影響 人文, 8, 111-118.
- 竹網 誠一郎・高梨 実・鎌原 雅彦・小方 涼子・高木 尋子 (1998). 〈研究報告〉 高校生の学校適応に関する研究 学習院大学計算機センター年報, 19, 17-28.
- Thompson, E.A., Eggert, L.L., Randell, B.P., & Pike, K.C. (2001). Evaluation of indicated suicide risk prevention approaches for potential high school dropouts. *American Journal of Public Health, 91*, 742-752.
- 東京都教育委員会 (2013). 「都立高校中途退学者等追跡調査」報告書 東京都教育委員会 Retrieved from <http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2013/03/DATA/60n3s302.pdf> (2018 年 9 月 24 日)

### 脚 注

1. 本研究は JSPS 科研費 (若手研究 B, 課題番号: 16K17324) の助成を受けて行われた研究の一部である。
2. 本研究の一部は, 日本コミュニティ心理学会第 18 回大会 (東京) および日本教育心理学会第 57 回総会 (新潟) において発表されました。
3. 本研究にご協力いただきました高校の生徒のみなさん, 先生方に心から御礼申し上げます。